

ものづくりにおける男女の役割とその実態 —エチオピア北部・アムハラ州の織布製作を事例に—

板垣順平

はじめに

エチオピアの主要民族であるアムハラ (Amhara) の人びとは、その多くが北部地域に居住する。彼らが着用する伝統的な織布は、現在でもその地域に暮らす織師たちによって製作されている。

アフリカの各地で伝統的な織布の製作者の多くは男性である。井関 [2000: 263] は、織機のような「機械化した用具や道具を新たに導入するのはこれを主業として営む男性であり、女性はそれ以前の旧形態を引き継ぐか、あるいは手芸的要素が強い織作業や単に労働力を提供する立場であった」と指摘した。

アムハラにおいても、織布の製作をおこなうのは主に男性であり、女性たちは織布の材料となる糸を紡ぐ作業までにとどまっている。

本論が対象とするアムハラ州の州都バハルダールにおける織布製作には、専従の織師だけでなく、農閑期に地方村落からやってくる出稼ぎ織師や刑務所の受刑者が服役期間中に従事している。出稼ぎ織師が働く工房や刑務所では、分業体制で織布の製作をおこなうなど、工業制手工業の手法などでも織作業が展開されている。

しかし興味深いことに、この地域では、伝統的な職能集団の枠をこえてさまざまな背景の人びとが織布の製作に従事するようになったにもかかわらず、女性の参入は未だほとんどみられない。

そこで本論では、男性織師の生業活動の実態と作業の特徴を検討したうえで、アムハラ州の織布製作に女性の参入が困難である背景について予備的な考察を加える¹⁾。

調査地の概要

アムハラ州の州都バハルダールは、首都アディスアベバから北方に約 580 km にある (地図 1)。16 世紀以来、北部の旧都ゴンダールやアクスムと南部の都市を結ぶ陸上交易の中継地として栄えてきた商業都市である。現在のバハルダールは近年の都市化に伴い全 17 の行政区画に区分されている。中央部に位置する 1 区から 5 区までは、各行政機関やホテルなどの高層ビルが立ち並び、市街地から離れた 10 区と 11 区には、織師や鍛冶職人、皮なめし職人などの職能集団が混在して居住する。

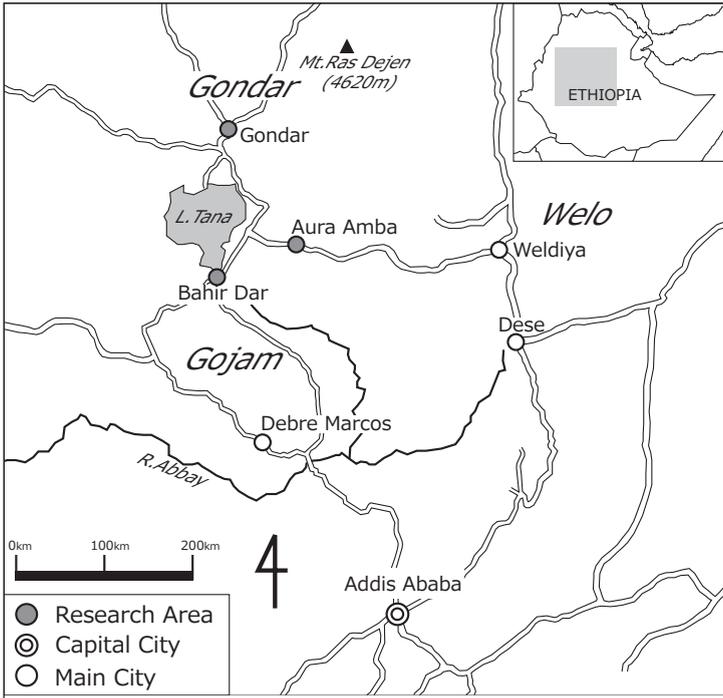


図 1. アムハラ州の主要都市と調査地（筆者作図）



写真 1. アムハラの特従の織師（2008 年筆者撮影）

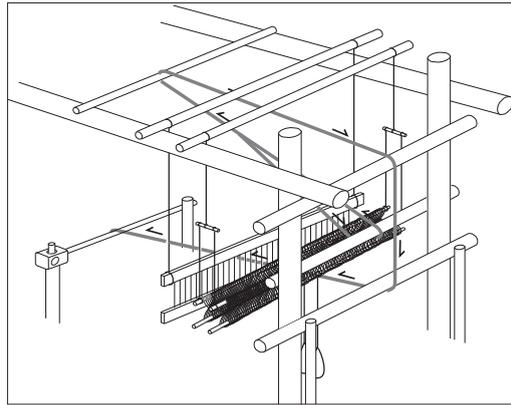


図2. アムハラ織機の立面図（筆者作図）

太線はタテ糸の設置。矢印は設置手順を表す。

織師の種類

バハルダールでは、大きく3つの異なる背景をもった人びとが織布製作に従事している⁽²⁾。

まず、専従の織師 (*Shemane*) は、タテ糸を整える整経作業やタテ糸の糊付け、織作業などの製作工程をすべて自らおこなう (写真1, 図2)。客は彼らのもとを直接訪れて、織布に必要な分量の木綿糸⁽³⁾を手渡し、手付金として作業費用の半分を事前に支払う。このように専従の織師たちは、基本的には受注生産体制をとっているため、注文が途絶えても織師が自前の資金をもとに織布をつくり貯めることはしない。



写真2. 出稼ぎ織師 (2008年筆者撮影)

作業場内には、彼らが織作業をおこなう織機とその上に寝床が設置されている。

次に、一定の期間⁽⁴⁾だけ地方からバハルダールにやってくる出稼ぎ織師 (*Werou Shemane*) がいる (写真2)。彼らが滞在する期間は、2週間から半年以上と個々の本業や家庭環境によって大きく異なる。しかし、出稼ぎ織師の多くは農耕民であるため、農閑期の5月から8月にかけて出稼ぎ織師は多くなる。彼らは、雇用主である専従の織師の作業場に住み込みながら製織だけをおこなう。また、整経やタテ糸の糊付け、素材となる木綿糸の準備などはすべて作業場主がおこなう。出稼ぎ織師の収入は織布の種類と生産枚数によって決定するため、織布の品質よりも生産量に重点をおいた作業となる。そのため、1日に製織する布量は専従の織師の3～4倍にもなる。

最後に、バハルダール市の郊外にあるアムハラ州第3刑務所⁽⁵⁾には、織布製作に携わる受刑者が約400人いる(2008年調査時)。ここでは糸巻き作業者⁽⁶⁾ (*Aqerami*) 約80人と整経作業者⁽⁷⁾ (*Metentenami*) 21人、タテ糸の糊付け作業者⁽⁸⁾ (*Makaryami*) 3人、そして織師(310人)が、従事する作業工程ごとに分業をおこなっている(写真3)。

刑務所で作業する織師には、自前の織機を所有する者と、一時的に他者から織機の借料を支払って使用する者がいる。織機を所有する織師の多くは、自身で布をつくり貯めるだけでなく、バハルダール市街地や郊外に居住する人びとが刑務所に赴き、織師に直接発注する場合もある。直接注文によらない織布製作に用いるタテ・ヨコ糸には工業製木綿糸を使用し、その入手をはじめ、糸巻き・整経・糊付け作業の経費はすべて織師が負担する。織り上がった布は仲買人となる受刑者たちによって集められ、1週間に2回開かれる定期市で販売される。直接注文による織布製作に用いるタテ糸は工業製木綿糸を使用するが、ヨコ糸には注文客



写真3. 刑務所内にある織作業場 (2008年筆者撮影)

織機は1階と2階両方に設置される。

表 1. バハルダールにおける織布の生産体制

	糸紡ぎ	糸の入手	糸巻き	整経	タテ糸の糊付け	機仕掛け	試織・製織
専従織師	×	○	○	○	○	○	○
出稼ぎ織師が働く工房							
工房主(専従織師)	×	○	○	○	○	○	○
出稼ぎ織師	×	×	×	×	×	○	○
刑務所							
糸巻き作業	×	×	○	×	×	○	×
整経作業	×	×	×	○	×	×	×
糊付け作業	×	×	×	×	○	×	×
織師	×	○	×	×	×	○	○
女性	○	×	×	×	×	×	×

が持参した手紡ぎ糸を主に使用する。注文客の要望によって、織師が刑務官を通じて女性受刑者に手紡ぎ糸の製作を依頼して、それを使用する場合もある。

このように、専従の織師はすべての作業工程を自身でおこなうが、一定の期間だけ織師となる人びとは分業体制で織布を製作する傾向がある(表1)。

しかし、先述したように織作業をおこなうのは主に男性であり、女性は織布製作の準備作業である糸紡ぎ作業をおこなうまでにとどまっている。

以下ではアムハラの人びとの生業活動や男女間の役割をふまえて、女性が織作業をおこなわない背景について検討する。

アムハラが生業活動と夫婦間の役割

織師は、鍛冶師や土器職人と比較して、アムハラの人びとの間で、婚姻や食事などの点において忌避の対象とされていない⁹⁾ [Quirin 1992: 32-33; Freeman & Pankhurst 2001: 265]。他方、織師は、社会文化的に周縁化されている土器職人と婚姻関係をむすんでいるという報告がある [Leslau & Kane 2001: 80-81]。また、アムハラ農村部において、織師は土器職人や皮なめし職人と同様に、特定の居住環境に暮らしており、地理的に周縁化されている。さらに、織師もまた、ほかの職能集団に属する人々と同様に、耕作できる土地を保有していない。

このように、織師は、地域的な状況に応じて、ときには土器職人や皮なめし職人と同様に社会文化的に周縁化されることがある一方で、彼らとは区別されて農耕民と社会的な関係をむすんでいることもある。

このような社会性をもつアムハラの人びとの場合、農作業は専ら男性の役割とされ、女性は炊事や洗濯などの家事をはじめ、育児や農作物の売買などをおこなうことが期待されている。日常生活における仕事の役割は男女それぞれ独立したものととらえられており、「男性の仕事に女性が、女性の仕事に男性が関与することはない」 [Leslau & Kane 2001: 41]。

一方、織師の夫婦間では、妻が夫に織布の製作を依頼する際であっても、相当の作業代金を夫に対して支払う。アムハラの女性が現金を獲得する手段として「アムハラの女性の多くは、家事や仕事の合間に継続性を必要としない籠編みや糸紡ぎなどをおこなう」[Leslau & Kane 2001: 43] といった報告もある。夫が織布を製作していないときは、妻が手紡ぎ糸を定期市に売りにいき、それによって得られた収入は彼女自身が管理・使用することが当然と考えられている。しかし、織師である夫は、織布を製作する際に妻が紡いだ糸を使用する場合であっても、素材と紡ぎ作業の代金を妻に対して支払う。また、夫が得た収入は、食事代や家の修理代など、家族全体の生活費として支出する。このように、織師の夫婦間では、お互いに織布や手紡ぎ糸を依頼する際には現金が必要となる。また、それぞれが得た現金の使用についても、妻が得た収入は妻自身が自由に使用し⁽⁴⁰⁾、夫が得た収入は主に家庭のために使うといったように、それぞれの収入の使用目的が異なっている。

織作業の特徴と作業姿勢

土器職人や鍛冶職人といった職能集団における製作技術の多くは、数十種類の作業工程に細分化されており、その習得期間は長期にわたる場合が多い。それにくらべて、パハルダールにおける織布製作の作業工程は、どの織師も一律的であり、専従の織師以外の者が担っても支障がないものが多い。そのため、先述した出稼ぎ織師や刑務所の織師のように、熟練技術をもたない人びとでも織布の製作に従事することができる。

アムハラの織機は「水平機一足踏み式機」である。織機には、地面を約70～80 cm 掘り下げて踏み木部分を地下につくり、織師が地面に腰をおろして織作業をおこなう地機（穴機）と、踏み木部分を地面に設置し織師が座椅子に座って織作

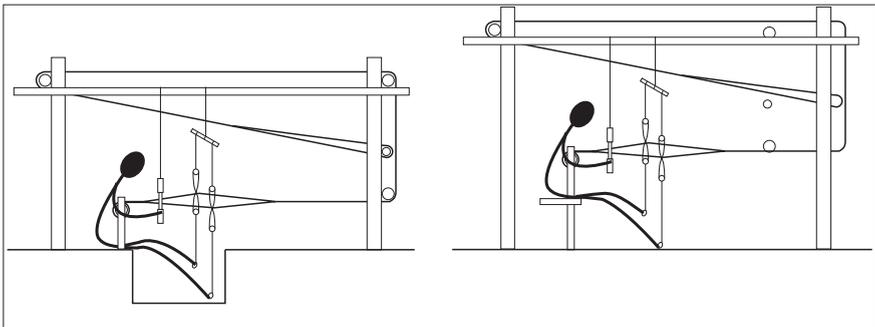


図3. アムハラの織機（筆者作図）

左：踏み木位置に穴があるタイプ。右：座椅子があるタイプ。

業をおこなうものとの2種類がある(図3)。エチオピアの織機の伝統的な形態の特徴は、地機であると指摘する文献もある⁽¹¹⁾ [Roth 1977: 62; 川田 1997: 61]。

前者の穴機で布を織る場合、その作業位置にある穴に足を入れて座り込み、織機に固定されるような姿勢となる。そのため、作業中に何度も立ったり座ったりすることが困難であり、常に足を投げ出して織機の操作をおこなう。多くの織師は最低でも3～4時間⁽¹²⁾はそのままの姿勢で織作業をおこなう。

炊事や洗濯、育児、農作物の売買など、一日のうちに多種類の仕事をこなすアムハラの女性たちが織作業をおこなうと仮定すると、頻繁に織作業を中断することとなり、作業効率や布の出来具合に支障をきたしてしまうことが予想される。織機の構造が、女性の作業への参入をときにさまたげるような特徴をもっているとみることができる。

まとめと今後の展開

これまで、アムハラの織布製作について女性の参入が困難とかがえられる背景について報告してきた。これらの予備的な検討から、織師は、地域的な状況やその歴史的な背景に応じて、周縁化される程度が異なっていることが予見された。現在は、織布製作の商業化とともに、出稼ぎ織師や刑務所の織師のように、さまざまな人びとが織布製作に従事している。しかし、女性が織作業に参入する事例は、筆者が見聞した限りでは、アムハラ州の主要都市のひとつであるゴンダール郊外のウォレカ地区で、雨季の間のみ織作業をおこなう女性の土器職人(写真4)と、バハルダールから北東約60 kmに位置するアウラ・アンバ(Aura Amba)村で織作業をおこなう女性の2例しかなかった(写真5)。実際に、女性が参入している事例の詳細については、今後の調査をふまえて報告したい。

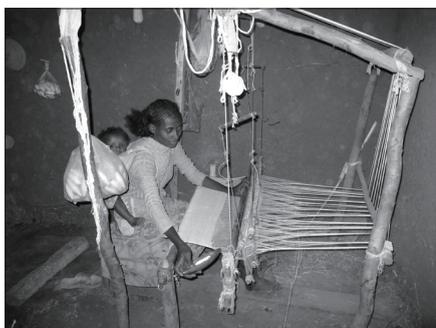


写真4. ゴンダール地方・ウォレカ地区で織作業をおこなう土器職人
(2008年筆者撮影)



写真5. アウラ・アンバ村の女性織師
(2008年筆者撮影)

注

- (1) 本研究は、文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 A (2007-2011 年)「アフリカ在来知とそのポジティブな実践」(研究代表者: 重田眞義)の成果の一部である。
- (2) バハルダールでは、専従の織師や出稼ぎ織師、刑務所の織師などどの織師もアムハラの人びとである。
- (3) 専従の織師に織布を注文する際に一般的にはタテ糸に工業製木綿糸、ヨコ糸には木綿の手紡ぎ糸を使用する。
- (4) 彼らがバハルダールに滞在する期間は、その所有農地の面積や換金作物の種類、家族構成によっても異なる。
- (5) 筆者が調査をおこなった 2008 年 11 月時には、服役期間 2 週間程度から終身刑まで 1,850 人の受刑者(男性 1,801 人, 女性 49 人)たちが収容されていた。
- (6) 糸巻き作業は主に見習い織師(*Redai*)がおこなう。彼らの多くは、3ヶ月から6ヶ月の間、指導者となる織師の傍で織機の操作や布の製織方法などを視覚的にとらえ、機仕掛けや製織作業を手伝いながら織技術を習得してわずかな収入を得る。
- (7) 糸の整経(経糸を整える作業)にたずさわる人の多くは、見習い織師であった(2008 年調査時)。また、整経をおこなう受刑者の服役期間は数週間から半年間までと短かった。彼らが製織にたずさわらないのは、道具や織機がないことや、道具の入手ができる頃には服役期間を終えてしまうためと考えられた。
- (8) 糊付け作業をおこなう者は、2007 年まで 6 人であったがそのうちの半数が既に出所したため、現在は 3 人の作業者だけである。また、糸巻きや整経の作業者はそれぞれに必要な道具や素材を織師から与えられるため、作業費用がそのまま収入となる。糊付け作業の場合、エチオピア起源のイネ科作物テフの粉や燃料となる木炭などはすべて糊付け作業者が準備する。
- (9) アムハラの人びとの間では、鍛冶職人や土器職人、皮加工職人などの手工芸品製作に従事する職能集団は特別な能力をもつ存在として畏敬の対象とみなされてきた。彼らに対してほかの社会集団の人々は、婚姻関係をむすぶことや、食事をとむことを忌避したり、特定の場所に彼らを居住させるなどの空間的隔離をおこなった。さらには、握手などの身体の接触や彼らの住居へ立ち入ることを禁忌とした [Freeman & Pankhurst 2003: 1-8]。このような状況について Quirin [1992: 65] は、彼らの多くが 14 世紀頃までキリスト教への改宗に反発し、土地を所有せず工芸品の製作を主な生業としたため、アムハラ社会において忌避される対象として社会に組み込まれてしまった可能性を指摘している。また、この地域で伝えられている口頭伝承では、アムハラ社会において古くから忌避対象とされてきたユダヤ教信者の人びとが、織布製作をはじめさまざまな工芸品の製作活動に従事し、その技術を継承してきたといわれている。
- (10) 日本では、妻が内緒でためた現金を「へそくり」というが、これはもともと「内緒で麻糸を繰って得た現金」という意味であった。
- (11) 西アフリカのマリを調査した川田は、西アフリカの足こぎ織機と西アジアで広く使われている穴を掘った足こぎ織機との類似性を指摘したうえで、アフリカでは、この型の織機がエチオピア、スーダン、東アフリカの一部、西方ではチャドや中央アフリカ共和国北部にまで見いだされることを指摘した [川田 1997: 61]。
- (12) 専従織師 50 人が作業に従事した時間の平均値(2008 年調査時)。

参考文献

<邦文>

- 池上岑夫. 1980. 『大航海時代叢書第Ⅱ期—アルヴィレス エチオピア王国誌』岩波書店.
- 井関和代. 2000. 『アフリカの布—サハラ以南の織機・その技術的考察』河出書房新社.
- 川田順造. 1997. 『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』東京大学出版社.
- 長島信弘・石川由美訳. 1991. 『ナイル探検』岩波書店.
- 福井勝義編. 2005. 『社会化される生態資源—エチオピア絶え間なき再生』京都大学学術出版会.
- 村川堅太郎. 1993. 『エリュトウラー海案内記』中央文庫.
- 吉本忍. 1987. 「手織機の構造；機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12号：314-447.
- 和田正平. 1987. 「スーダン・サバンナ帯における生業形態の特質」『アフリカ民族学的研究』同朋社.

<欧文>

- Aspen, H. 2001. *Ambara traditions of knowledge: spirit mediums and their clients*. Harrassowitz Verlag, Memmingen.
- Beckingham, C.F. & G.W.B. Huntingford 1961. *The Prester John of the Indies: a true relation of the lands of the Prester John, being the narrative of the Portuguese Embassy to Ethiopia in 1520/ written by Father Francisco Alvares: the translation of Lord Stanley of Alderley (1881): revised and edited with additional material*. Hakluyt Society at the University Press, Cambridge.
- Freeman, D. & A. Pankhurst 2003. *Peripheral People: The Excluded Minorities of Ethiopia*. Hurst and Company, London.
- Kaplan, S. 1992. *The Beta ISRAEL (Falasha) in Ethiopia: From Earliest Times to the Twentieth Century*. NYU Press, New York.
- Leslau, W. & T.L. Kane 2001. *Amharic Cultural Reader*. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- Picton, J. & J. Mack 1979. *African textiles*. British Museum Publications Ltd, Bedfordshire.
- Quirin, J. 1992. *The Evolution of the Ethiopian Jews :A History of the Beta Israel to 1920*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Roth, L.H. 1977. *Studies in Primitive Looms*. Ruth Bean Publishers, Wiltshire.